

シンガポールの新戦略は？

約半年ぶりにシンガポールを訪れる機会があった。行くたびに変化するシンガポール。そのダイナミズムを感じるのは、訪問の楽しみの一つだ。私が金融担当相をしているとき、シンガポールのリー・シェンロン首相(当時大蔵大臣)が私を招いて激励してくれたことがあった。その時、「シンガポールは全てにおいて改革的で、すごいですね」と私が述べたところ、リー氏は次のように答えた。

「いやいや、私たち小国は、常に先頭を走っていないと生きてゆけないのです」

この、一種の危機感・悲壮感が、こうした都市国家にはある。

シンガポール建国の父であり、20世紀を代表する偉大な政治家リー・クアンユー氏が、先般他界された。シンガポールがマレーシアから切り捨てられるような苦しい形で独立したのは1965年。当時まだ30代だったリー・クアンユー氏が首相として牽引してきた。そのリー・クアンユー氏と、ある会議の食事会で、文字通り席を並べて(臨席で)議論したことがあった。当時シンガポールは、はじめてカジノを作ることを選んだ直後だった。それまでカジノに反対してきた同氏に対し、「どうして賛成に回ったのですか」と聞いてみた。同氏は、いとも簡単に、「今のことは若い世代に決めさせるのが良い」と答えた。変化することに躊躇しないシンガポールのスマートさをしみじみと感じた。

金融センターとして、そして観光立国として、カジノを持つことは自然なことだ。その後もシンガポールは常に新しい政策を取り入れ、近年はアジアの教育ハブとしての地位を確固たるものにした。イェール大学、インシードなど欧米の有力大学が、こぞってシンガポールに進出している。教育鎖国の日本と差は、大学ランキングにも現れている。世界のトップ100大学に入るのは、日本、シンガポールとも3校だ。シンガポールの人口は日本の23分の1であることを考えると、その質の高さは凄まじい。

実は1990年代にシンガポールは、「経済成長は資本や

労働といったインプットの増加によるもので、生産性上昇は低い」という批判を受けた。こうしたなかで、教育政策の徹底した強化が行われたのだ。

さて、今回の訪問で最も関心があったのは、シンガポールの次なる戦略がどこにあるか、であった。特に、リー・クアンユー氏亡き後のシンガポールの政策運営には、大いに関心がある。

シンガポールは今年2015年に、建国50周年(ジュビリー年)を迎える。また2015年は、東南アジア諸国連合(ASEAN)統合の年でもある。こうしたことを意識し、シンガポールではひき続き多くのプロジェクトが進行中だ。まず物流面でシンガポール港は、コンテナ取扱量ですでに世界第2位の地位を占めているが、2020年の稼働を目処に第3、第4ターミナルの建設を進めている。さらに2027年を目処に、最西端の地区にコンテナターミナルを集約する構想も進行中だ。シンガポールは、その空港(チャンギ空港)の素晴らしさで知られているが、それについても2017年に第4ターミナルを完成させ、その先2025年を目途に第5ターミナルを作るといふ。その構想の大きさに圧倒される。さらに注目される点がある。それは、シンガポールとクアラルンプール330キロ90分で結ぶ高速鉄道を、2020年に開業させることだ。一日40万人の利用が見込まれている。

もちろん、シンガポールもいくつかの深刻な問題を抱えている。格差の拡大、一党支配への反発、住宅価格の高騰などだ。こうしたなか2013年には、インド人街で40年ぶりの暴動が起きている。しかしシンガポールを見ていると、「常に最先端をいく」というリー・シェンロン首相の言葉の意味がよく理解できる。同時にASEAN諸国が、中国に警戒感を示しつつも、アジアインフラ投資銀行(AIIB)構想を支持する理由も見えてくる。

シンガポールは、ASEANの中心都市を超えて、「アジアの首都」を目指しているかのようだ。

本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、個人的な見解に基づく情報であり、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。Copyright©2015 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com